

□ 代表的な疾病

■ 副腎疾患

左右の腎臓の上方に、ちょうど腎臓が帽子をかぶる状態で存在しています。右は腎臓と肝臓、左は腎臓と脾臓の間の奥深いところにあります。その形は“ウニの身”のような形をしており、大きさは2～3cm、厚さが5mm程度の小さな臓器です。腎臓に接するようになる様にあることから副腎といわれていますが、その働きは全く違います。副腎の主な働きはさまざまな“ホルモン”を産生して、体のバランスや血圧の調節を行っています。

【副腎で産生するホルモン】

- ① コルチゾール(ステロイド): 体のバランスを調節する働きをします
- ② アルドステロン: 血圧を調節する働きをします
- ③ アドレナリン: 血圧を調節する働きをします

これらのホルモンは、正常な状態であれば体内のバランスや血圧を正常に保つために働いていますが、副腎に腫瘍ができてこれらのホルモンが過剰に産生されるようになると、体内のバランスがくずれて、肥満や糖尿病になったり、血圧の上昇や動悸がしたり、様々な症状が出てきます。

おもな副腎腫瘍

副腎腫瘍は大まかに次のように分類されます。

1) 機能性腫瘍: 治療の必要がある腫瘍です

- クッシング症候群
- 原発性アルドステロン症
- 褐色細胞腫(かっしょくさいぼうしゅ)

2) 非機能性腫瘍: 一般的には治療の必要性はありません

機能性腫瘍とは副腎の中のホルモンを産生する細胞が異常に増殖して、腫瘍になったものです。クッシング症候群は、コルチゾール(ステロイド)を過剰に産生する腫瘍で体内のバランスがくずれ、肥満やムーンフェイス(顔が丸くなる)、糖尿病や血圧が高くなるなど様々な症状が出現します。原発性アルドステロン症では、血圧を調節するアルドステロンが過剰に産生されるため血圧が上昇します。この疾患では数種類の降圧剤を服用しても血圧をコントロールすることが難しくなります。褐色細胞腫では、心臓や血管に作用して心臓の拍動や血圧を調節するアドレナリンが多くなり、動悸や高血圧を引き起こします。

非機能性腫瘍は副腎に腫瘍を認めますが、先に述べたような特定のホルモンを産生しない腫瘍のことで、通常は無症状で良性腫瘍であるため治療の必要性はありませんが、腫瘍のサイズ4.0cm以上であると悪性の可能性もあり、摘出が必要になる場合もあります。

副腎に腫瘍が見つかった場合には、どのようなタイプの腫瘍であるか? 治療が必要であるのかそれとも必要のない腫瘍であるのか? を診断する事が重要です。副腎に腫瘍が見つかった場合には琉球大学附属病院の第二内科(内分泌代謝科)で精密な検査をして確定診断してもらいます。そして、外科的な治療(腫瘍の摘出)が必要と判断された場合には泌尿器科で手術を行います。

副腎腫瘍の治療

機能性腫瘍のクッシング症候群、原発性アルドステロン症そして褐色細胞腫は手術で摘出する必要があります。手術は開腹手術と内視鏡手術があります。副腎は体の奥深いところにあるため、小さな臓器であるにもかかわらず、以前の開腹手術ではお腹を大きく切開する必要がありましたが、最近では内視鏡を使った『腹腔鏡手術』が主流になってきています。副腎の場合、取り出す臓器(腫瘍)が小さいのでまさに理にかなった方法です。お腹に3～4ヵ所の穴を開けてカメラや細長い手術器具を入れて、テレビに映し出される中の状態を確認しながら、腫瘍を剥離して摘出するという方法です。この内視鏡手術は開放手術に比べて傷が格段に小さいため、手術後の痛みも軽く手術後の回復が早くなりました。翌日には食事を開始して歩行することが出来るため、体に負担の少ない低侵襲手術と言われております。

最後に

最近、血圧が急に上がってきた、薬を服用して血圧の下がり方が良くない、動悸がする、血糖値が高く下がりにくいそして体重が急に増えてきたなどの気になる症状がでてきた方は、かかりつけ医に副腎ホルモンの検査など申し出てください。そして、検査値に異常を指摘された方は当院の第二内科(内分泌代謝科)で精密な検査を行ってもらってはいかがでしょうか。